

**留学先国名** : イギリス

**留学先学校名** : University College London

**留学期間** : 平成 28 年 9 月 25 日 ~ 平成 29 年 6 月 10 日

#### ○生活としての留学

外国人にとって日本は魅力的な観光地である。留学中にも、日本に旅行したことがあるという外国人には何人も出会ったし、とりわけアジア圏に住む人々は何度も日本を訪れ、東京・京都・大阪以外の都市にも多く足を運んでいた。日本の大きな魅力は、そのエキゾチックさにあろう。街にはほとんど日本人しかおらず、人々は日本のドラマ・テレビを視聴し、日本の音楽を聴く。国境により隔離された空間で完結する文化は、大国にしか成し得ないことであるが、その中でも日本は圧倒的に異質であると感じる。

留学先のロンドンはどこまでも多文化な場所であった。街で聞こえる声は半分は英語、半分はどこか違う国の言語といった感じだし、英語にしてもきれいなブリティッシュアクセントで話す人はさほどいない。レストランのウェイターはほとんど外国人で、大学の教授陣といった知識人層でさえ、他のヨーロッパ諸国出身がかなりの割合を占める。

こうした環境は日本人である僕にとって、生きやすくもあり、生きにくくもあった。アジア人も多く、友人作りの際もさほど苦労しないといったことや、中華系スーパーマーケット、日中韓のレストランはじめ、多様なお店があることは、生活面の苦労をかなり軽減した。日本人の留学生もそれなりにいて、彼らとの交流も息抜きになった。しかし同時に、街に「外国人」が溢れ返っているという事実は、「外国人」と「イギリス人」の区別が相対化され、失われていくということでもある。日本では、外国人は日本語が話せない「お客様」として迎え入れられるだろうが、ロンドンでは外国人はもはやお客様ではない。外国人も当然のようにイギリスの社会に適合することが求められ、評価される場面においてもイギリス社会の基準において平等に評価される。そうした厳しい競争環境にさらされた時、チャイナタウンで中国語で暮らす中国人のように民族によって固まり、外部環境から自らを護るという選択肢も当然ある。しかしもちろん、僕は「グローバルに生きる」ことを選びたいと思うし、海外での競争にチャレンジしていきたいと強く思う。

だが同時に、海外での生活の辛さは、裏返せば日々の成長の実感でもあった。スターバックスでコーヒーを頼む時に緊張していた留学当初から始まり、日本ではなんでもない生活の一シーンずつが新たな挑戦となる。これを毎日乗り越えていくことは、時にはつらくなっただけで、むしろ多くの場合で成長の喜びへと変わっていった。

#### ○友人からの学び

大学からの学びと同じくらい、友人から多くを学んだように思う。多文化すぎるといってもよいロンドンということもあって、多くの国籍の友人ができた。ヨーロッパ人たちからは、同じ白人でもアメリカとはやはり異なったヨーロッパ的な価値観を垣間見ることができた。彼らは「権利」や「民主主義」といった歴史的な構成物

を当然のごとく捉えており、ヨーロッパの土台となる思想家に皆がそれなりの理解を持っているなど、アジアとの差を感じるシーンも多かった。もちろん、ヨーロッパ内部にも多様性があり、快活だが適当なイタリア人、真面目なドイツ人、議論好きなフランス人といったステレオタイプはある程度あたってはいると思わざるを得なかった。

さらに、アジア圏からの留学生も多かった。中国はもちろん、シンガポール・香港からの留学生も多くいたが、彼らと話していると、日本とアジア諸国との差異を実感するシーンも多かった。例えば教育制度にしても、シンガポールは日本より相当競争が激しく、扱う内容も（エリート教育においては）高度であった。あるいは、中華系シンガポール人の中国人としてのアイデンティティの強さなど、アジアの複雑なエスニシティのつながりを感じる場面もあった。

### ○大学での学修

もちろん留学の主目的である学業も大きな成果である。留学先のユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）は、世界大学ランキングでも常に10位以内にランクインする実力があり（東大を当然はるかに超えている）、教授陣、友人、学習環境すべての面において非常に恵まれていた。また、明治期には夏目漱石や日本の新政府の首脳陣らが留学したことで知られている。というのも、当時宗教色の強かったオックスフォード大・ケンブリッジ大が非欧米人への門戸を閉ざしていた中、特定の宗教色を持たないUCLは積極的に外国人を受け入れるリベラルな大学であった。当時の日本人の留学生を記念して、現在でもキャンパスの中庭はJapan Gardenと名付けられている。

ロンドンという多国籍な街の、そうした自由な大学の中であって、私も日本のしがらみから離れ自由闊達に学ぶことができた。日本での法律の学修は多かれ少なかれ「暗記」の側面があるが、留学の最大のメリットは、自分で学術的な問題と向き合い思考する時間を得たことにあった。留学では法律を哲学的に考察する法哲学を履修するなどしたが、同授業においては教授は自分で思考することの重要性を繰り返し強調し、哲学史の暗記に留まらず思考力の養成を重視している様子が伺い知れた。自分もその中で自由に思考できたことは大きな収穫だった。

### ○おわりに

留学生活は今思い返せば一瞬で終わってしまったが、中身は充実していた。「視野が広がる」という経験は、それ以上分解することがなかなかできないが、無限の小さな発見を通じ、日本で生まれ育ったというバックグラウンドにきちんと固定されている自分を相対化することができた。そしてその自分をさらに成長させる手がかりを留学中に得ることができたと思う。